令和6年度デジタル技術を活用した発信力強化事業
【 ELSA Japan 合同会社 】

文部科学省

◎授業での活用　○家庭学習での活用　○パフォーマンステストでの活用　□小学校　☑中学校　□高等学校

実践のポイント

AIを活用した個別最適な学び、主体的・自律的な学びの創出

実践前	実践後
【生徒】英語で話す時間と量が少ない。また、自分の課題（発音等）に気付きにくい。 【教師】生徒一人一人の進捗や理解度を把握するのが難しい。 【ALT】１対大人数のコミュニケーションになりがち。	【生徒】**英語で発話する機会と量が増えた**。また、発音の課題に自ら気付き改善できる。 【教師】生徒一人一人の状況をリアルタイムに把握し、**個別最適な支援**を行うことができる。 【ALT】**より効果的な支援**を行い、日常的にも生徒とのコミュニケーション量が増えた。

実践内容

●実証校数：３校（中学校：３校）※渋谷区　●対象人数：349名（中学校：349 名）
●対象学年：中学校：第１～３学年　●アプリ 等：ELSA for Schools
●研究内容：
①授業での活用
本文内容理解、言語活動、導入等の場面で、週２～３回、５分～20分程度、単語練習、音読練習、ELSA AI（AI対話機能）を活用する。
②家庭学習での活用
宿題や自主学習の課題として、週１～３回、５分～、音読練習、ELSA AIを活用する。
③パフォーマンステストでの活用
パフォーマンステストとして、単元毎にELSA AIを活用する。

「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

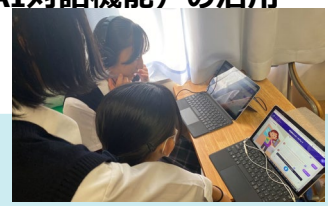
◆発音改善及び内容理解のための音読練習の活用

生徒が教科書本文を音読練習し、ELSA AIによる音素レベルのフィードバックを得ることで、より正しい発音を意識することができた。また、それに繰り返し取り組むことで、内容理解が深まった。

【教師】生徒の理解度や改善点を確認し、個別支援や授業デザインに活かす。
【ALT】発音の際の舌や唇の動きについてアドバイスし、スコアが改善したことを生徒と喜び合う。

◆セルフラーニングとしてのELSA AI（AI対話機能）の活用

生徒が自らの課題感に応じたレベル設定の課題を選択し、学んだことを生かしてAIとの会話に挑戦し、話す力と自信を付ける。



【教師】生徒に学びを委ねつつも常に進捗を確認し、個別最適な支援をする。
【ALT】単語で躓いている生徒に対して英語で言い換えて説明することで、生徒との会話が生まれる。

ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

◆長文配信により生徒の課題意識がブレてしまう活用

音読練習として配信する英文が長すぎると、AIによる修正点の指摘が多く提示されすぎてしまい、生徒が何をどのように改善したらよいか分からなくなる。

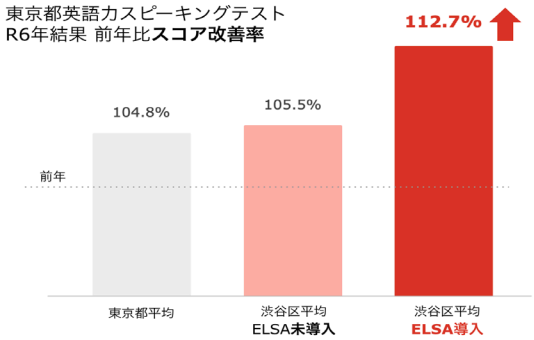
◆教科書の内容・日常との接続が不明確な活用

ELSA AIのテーマが、教科書の本文内容や身近な話題でなくなると、ELSA AIでの練習が、活きた英語の活用場面に繋がらない。

【教師】
単元及び１単位時間の中で生徒に身に付けさせたい力を明確にし、学習のねらいを焦点化して課題配信を行うとよい。

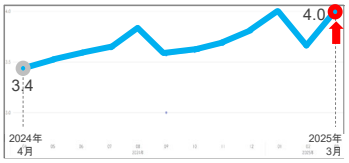
成果検証

◆生徒の英語力



◆生徒の関心・意欲

パフォーマンステストや日々のALTとの会話、留学生との交流場面等において、自信をもって積極的に英語で話すことができるようになった。まずAI相手のトレーニング、という安心感も効果的で、英語に限らずコミュニケーション能力が向上した。



渋谷区独自の振り返りアプリにおける「学びに向かう力」の自己評価スコアが、利用前3.4から利用後4.0にアップ

◆教師・ALTの指導

客観的な指標に基づいた、より効果的な指導・支援を実現できた。また、スコアが上がったり自信をもって話せるようになったりする生徒の変容を見て、教師としてのやりがい・自己肯定感を高めた。